

ソーシャルワークと本

大熊由紀子著

「誇り・味方・居場所」

『私の社会保障論』

ライフサポート社

2016年 1600円

評者 文教大学 星野晴彦

本書は、有名なジャーナリストで

あり、現在大学教授である大熊氏が、日本の社会保障を変えるために書き続けた論説を一冊にまとめたものである。決して社会保障論ということや硬い読み物ではない。とても読みやすい文章ではあるが、ぐっと相手の心に飛び込んでくる中味である。ちなみに氏の「寝たきり老人のいる国、いない国」は日本の福祉を変えたと高く評される本であり、多くの方に読まれた本である。

本書の構成は三部構成となっており、第一部「ケアの思想ではケアの文化と本質」第二部「社会保障が変わる・変えるでは変革者の実践を紹介」第三部「わが母の地域包括ケアでは真の社会保障が誇り・味方・居場所を保証することであることを自身の体験から明らかにしている」となっている。そして社会保障を

「虫の目」「鳥の目」「歴史の目」

「疑う目」から捉えている。

氏のモットーは「前例や制度は超

えるために存在するもの」「倫理は、想像力と度胸に裏打ちされてこそ価値がある」であり、一貫して骨太の正義が貫いているのがわかる。

例として、1989年に厚生省介護対策検討会委員として「介護をめぐる9つの誤解」として作成した指針である。

「自分が倒れても妻か息子の嫁が介護してくれるから大丈夫」

「自分は食事に気をつけ、体をまめに動かしているから寝たきり老人やぼけ老人にはならない」

「在宅医療・在宅福祉は家庭介護が前提」

「ホームヘルパーの勤務時間は昼間の8時間ですよ」

「女房だつてやっているのだから介護なんて誰にでもできる。それを資格なんて」

「介護には大いに外人労働者を活用すればいい。何しろ安いですから」

「ボランティアを介護に活用すれば費用面の問題を解決できる」

「日本人は家庭内に介護が入るのを好まない」

「福祉先進国並みのホームヘルパーを揃えたら、財政的にとんでもない

ことになる」

今ではかなりこれが誤解であるということも承認されてきたのだが、これを1989年に述べていることに着目したい。しかもこれらを述べている人が、労働省元事務次官であったり、政治家であったり、それなりの有識者と言われるような人々の発言を取材しているのである。そのような風潮に対して果敢に意見を具申ししている強さは、深く認識すべきものであろうと思われる。

しかし氏は過去の実績にとどまっていたような方ではない。デンマークの教育プログラムである、プロが患者に教わる「でんぐり返し」という常識を逆転させる発想に言及している。さらにホームホスピスの設立の動きに関しても積極的ににかかわっている。精神病院の問題についても取り組んでいる。子宮頸がんワクチンの犠牲になった少女たちの問題も取り上げている。いまでも「福祉と医療・現場と政策の新たなえにしを結ぶ会」を主宰している。そうそうたるメンバーが参加している。

改めてこの正義とパワーを考えた時、私たちソーシャルワーカーたちは何をしているのだろうかと考えさせられる時がある。前線のワーカーたちも誠実に目の前の利用者に関

わっているだろう。しかし制度や社会状況などにぶつかり打ちひしがれることも多いだろう。その時に仕方がないと、感じてあきらめてしまいうことも多いのではないだろうか。ソーシャルアクションはソーシャルワークの一つと言われながらも、必ずしも十分に機能しているとは限らない。

改めて本書を読みながら私たちの在り方に投げかけてくれるものが多いうように感じる。氏はジャーナリストだからと、いうのではなく、このぶれない姿勢に私たちソーシャルワーカーが学ぶことが多いように感じた。

ぜひご一読をお勧めしたい。変に気合を入れなくて読める本である。

